



エコツアーカフェKOUZU  
開催のお知らせ

# 神津島

## を知ろう!!

ゲスト梅田勝海さん

お気軽にご参加ください。事前申し込み不要、  
参加自由です。

「エコツアーカフェ」は、地域や、地域の未来などに  
関心をもつ人が気軽に集まり、おしゃべりをする場です。

日時 11月28日(木)

午後 7:30 ~ 午後 9:00

会場 開発センター

主催 神津島村商工会 (Tel 8-0232)

テーマ

神津島の百観立日霊並場

について



神津島の百観音霊場

神津島史談会

## ◎、漂着した観世音を祀るお観音浦の西国札所と巡礼道

お観音浦(島の人たちはオカンノウと呼びます)は島の東側の海岸で、少し砂浜もありますが大凡は転石と岩場の続く、またいつも波の荒い磯です。

この海岸の長さは約一キロ程もあるのでしょうか、その海岸の中程では清冽な谷水が転石の間を、水音を高めて海に注いでいますが、全く此処には人の気配がありません。

天上山林道の終点の「おれっち」で車を降り、昔の儘の急勾配の坂道を草木にすがりながら降りて行くと、大石の重なる海岸に出ます、高波に打ち上げられた玉石が、そのまま自然の石垣のように土手を造り、それに萱、ツワブキ、明日葉が密生し、そこからの灌木が海岸と区切っています。

この海岸が、お観音と名付けられる元になった観音堂は、この灌木の茂みの奥にあり、茂みを掻き分けて行くと平坦な椿の林になり、そこから自然石を積み上げた方形の石囲いが眼につきます。

観音堂はこの石囲いの片隅に建てられています、新しく建て替えてあります。お堂の中は小さな土間と囲炉裏が切られ、座敷の左側の奥に祭壇があります。

座敷には花筵〔ハナムシロ〕が敷かれ、小さな卓袱台(チャブダイ)が囲炉裏の脇に置かれています。

祭壇には木箱の中に金色に輝く、二体の観世音像を納めてありますが、人気もない湿った座敷の重い空気の中で、糊でも切れたのか二体とも光背が落ちて、箱の中に入れてありました。

これが観音堂の御本尊で、御本尊の前にはいつ供えられたものか、封を切っていない干菓子(カシ)の袋が載せられていました。

お堂を囲む石囲いの中央に階段があり、その上の台地に島の人たちが札所と言うコの字形に石仏を並べた所があります。

コの字に整然と並ぶ石仏の中央には、大き目の観世音菩薩が据えられ、それから左側へ一番、二番、三番と続き、四番から十七番は右手に、十八番は左側に飛び三十番まで左手に並び、三十一番、三十二番、三十三番は中央の観世音菩薩像と繋がっています。

それぞれの石仏は船形の光背を背負う陽刻で、一つ一つの石仏の姿態は彫も深く、どれも素晴らしく端正な表情は、思わず人をひきつける魅力を感じます。

その石仏の幾つかに島の家の名が刻まれています、その石仏を寄進したこと

を表しているのでしょうか。

これらの石仏は高さ三十センチほどの台座に据えられています。陽射しの届かない所なので、台座から石仏の足元は一面に苔むしています。

また札所の裏は三、四米の岩壁ですが、観世音菩薩の裏に当たる所に穴を穿ち、小さな石仏が二体納められています。摩耗していて仏の顔も判りません、またこの穴を穿ち石仏を祀る何か理由があるのででしょうか。

この字の中央の観世音の前に「南無阿弥陀仏」と「慶応四辰年二月之建」「西暦一八六八年」と彫られた二十センチほどの玉石が二個並んでいます。これがこの札所と観音堂の開基でしょうか。

札所の入り口の左側に、「開眼西国三十三観世音供養塔」と刻まれた一・五米程の石碑が立っています。その側面にも文字が彫られていたようですが、浅い彫りでどうしても読むことが出来ません。

この台地の左手にも数体の石仏が祀られています。いずれも摩耗が激しく地藏菩薩とは思えますが、古い歴史を感じさせられる石仏です。

この石囲いの外に享保二十年(西暦一七三五年)と読める、丸石の石碑が建っています。これらを見ると石囲いの内外に祀られている石仏はそれぞれ建てられ

た年代が違うように思えます。

享保二十年(西暦一七三五年)は、村役場編「村史年表」によると、(享保二十年は未曾有の凶年にして、飢餓のため二百十一人死亡、内幼き者百四人」と記されています。この観音浦の岩山で、飢えのため泣く幼子や、年老いた親の為に、一握りのあしたばに手を伸ばした若い母親が、足元が崩れてそのまま墜落死亡したのはこの近くと、言いますのでこの母親を悼んだものか、またはこの飢饉で亡くなった二百余人の人々を悼んだものかも知れません。

この観音浦の札所は生涯で最愛の者を失った時、一日かかりでこの札所に詣で亡き人の冥福を祈る場所とされておりますが、荒い海を前に後ろは数百米の山肌を、木の根、草の葉にすがって降りて来なければならず、この頃は詣でる人も少ないと聞きます。

この観音堂の御本尊佛については、次のような伝承が伝えられています。

一つは観音浦の山で椿の実を採っていた島の女性が、海岸から届く光で仕事が出来ず、止む無く海岸へおりて見ると、波打ち際に観音菩薩像が流れ着いていたというもの、一つはこの浦の沖合で漁をしていたが、渚から届く光芒に目を打たれ、不思議に思い舟を漕ぎ寄せると、観音像が漂着していた言いそれで此

処にお堂を建てて祀ったというものです。

本尊佛が海から渡来した、川底から拾い上げたと言う伝承は、各地にあるようですが、神津島では瀧響寺の御本尊佛の「十五夜ばあさん」由来の阿弥陀如来像、この観音浦の御堂の本尊の観音佛、多幸の弁天様も宝永四年(西暦一七〇七年)、紀伊半島の潮岬沖を震源にした、宝永の大地震で漂着してきたものと言います。観音堂の脇を流れる小川を越えると広い台地に葉蘭がびっしりと茂り、玉石が何かを訴えるように並べてあります、昔此処に出家した人が庵を建てていたと言いますので、案外観音堂の開基はその辺に有るのかも知れません。いずれにせよこの観音浦はまさしく「海と信仰」と言う言葉をしみじみ思い浮かばせる雰囲気漂う海岸です。

## 那智の観音堂と中宮塚の石仏、

天上山の白島側の登山口のお金沢のだから坂を登り切ると、左に灌木の中に奥に通じる細道があります。

この道は島の人たちが(奥山)と呼んでいる宮塚山の旧道で、戦後ははるか下の方に自動車道路が出来たので、人の通ることもない道になりました。

この道の那智と呼ぶ所の、右側に入ると観音堂が見えます、広くもない境内の北側に建てられていて、島の人たちは「那智の観音堂」と呼んでいます。

お堂の中には如意輪観音の石像が二基、十一面観音の石像が二基と地藏菩薩の石像が四基祭壇に並べられています、一基の如意輪観音像の台石には「西国三十三所順礼、同行五十七人」また一基の十一面観音像の台石には「西国三十三所順礼、同行五十七人」また別の千手観音像の台石に(奉、巡礼西国三十三所、安永二癸巳年三月吉日、同行五十五人)〔安永二年は西暦一七七三年〕とありますので、この那智の観音堂は西国の巡礼と関わりが感じられます。

如意輪観音像一基の「西国三十三所巡礼、同行五十七人」と十一面観音像の台石の文字は同文であり。同行五十七人と人数も同じなので、これを一回と見れないでしょうか、そして十一面観音像の「安永二年三月吉日、同行五十五人」は

二回目と思われず。

従来この観音堂の那智と言う地名については、「かつて熊野の那智の人が住んでいたから」と言人もありましたが、此処を西国札所の打ち始めの一番寺、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町の、天台宗那智山青岸渡寺(なちさんせいがんとし)であること、またこの観音堂に祀られている如意輪観音は、那智の青岸渡寺の本尊佛であることから、この観音堂は西国巡礼(島ではお観音浦の札所)の打ち始めを意識していると思われ、此処から通じる中宮塚の道は西国札所の過酷な巡礼道になぞらえたものでしょう。

観音堂の脇から観音浦への道は、道筋は付いているものの灌木の茂みを、潜るようにして辿ると、その茂みの道脇に数体の地蔵が祀られています、漁で遭難した身内や乗組を失った船主が祀ったもの、岩海苔採りで波に払われた姉を助けようとした妹も波にもまれ、姉妹とも遭難した供養の地蔵、またどのような縁か「小夜の中山の地蔵」と伝えるもの、塚様と呼び基礎の下から経文を書いた小石が発掘された徳本塚などが道筋に祀られています。中宮塚を過ぎ急な坂道を降りると、つづきの地蔵堂と賽の河原に出ます。

### つづきの地蔵堂と賽の河原(西国札所への巡礼道)

中宮塚から坂道を下りて行くと「つづき」と言う所になり。ここで旧道と新しい林道が出会う所で、杉の木立の中に地蔵堂が建てられ、境内に流れる小川の水音がそれと知らせてくれます。

境内には中宮塚に据えられていた読本塚がここに移されていたり、祠の中に納まる地蔵の石佛などが祀られ、この石仏の後ろは、清冽な湧水が池を造り、それが小川になり流れています。

境内の右手奥に建てられている地蔵堂は、奥行きは二間程、間口は三間ほどもあるようで、入り口は厨房と座敷への上がり口で、囲炉裏のある座敷と厨房の部分は板壁で仕切られています。

座敷へ通ると正面に古びた逗子を据えた祭壇になり、その扉を開くと金色に輝く光背を背負う地蔵菩薩の木像が納められています、蓮弁からの高さは九〇センチもある大きな像で、そのお顔は誠に優雅な表情で天明(西暦一七八一〜一七八八年)の頃の作と伝えています。

このような山深い所に地蔵堂を建てる、どのような事情があったものか、地蔵堂にまつわる話を聞くこと出来ず、何時頃の創建なのかも知らないままです。

なを、此処の「つづき」と言う地名について、ツツキのツツは「阻む」で崖地や「包む」で山壁に包まれた地を、ツキはやはり崖地を意味して、山壁に囲まれた湿地帯という意味もある所です。

此処は中宮塚の崖地の下でまた湧水が流れているのでツツキと言う地名なのかもしれません。

この地藏堂から土手一つ挟んで賽の河原になります。

天上山の峰や谷間から流れ落ちる雨水がこの沢に集まり、泥流になって沢の兩岸を削り、また堆積した土砂が荒涼とした風景を作っていますが、今はここに砂防ダムを築いて泥流を食い止めています。それでも賽の河原と呼ぶにふさわしい雰囲気を感じさせられますが、今子安地藏が一体祀られています。

この賽の河原には、次のような悲しい話が今も伝えられています。

明治の末頃のことです、夜明けを待たず奥山の仕事に村を出た数人の人たちが、お金沢で若い女性と出会いました。「夜明けにはまだ間があるのに、この人はどこへ行ってきたのだろう」と不審に思いましたが、ただ挨拶を交わしただけで別れました。その頃の奥山への道は一人がやっと通れるような、上り、下りの険しい道で足早に奥山に急ぐ人たちは、もうすつかり、若い女性のことは忘れ

て道を急ぎました。

明るくなった頃、この人たちは「賽の河原」に着きました、ふと見るとこの河原に小石を積み上げたもの、お線香を手向けた跡、それに子供の玩具が残されています。そしてこの人たちは「アツ」と胸を衝かれた思いがしました、そう言えば途中出会った若い女性はこの頃幼い子供を亡くした、母親であったことに気付きました、日頃弄んだ玩具、そこへ小石を積み重ねて地藏菩薩の加護を願ひ、荒地の砂に額ずいて愛し児の冥福を祈ったのであろうその跡が、くつきり残されていて、思わずもらい泣きをしたことがあったと言ひ、「おそらく夜を寝もせずこの山道を辿り、嗚咽を堪えながら家路を急いでいたもの」と話し合ったことがあったと伝えていきます。

昔の乏しい暮らしの頃の母親たちの、精一杯の愛情の表現であったものでしょうか、しかし今でもこの賽の河原には幾つか小石を積み重ねた物を、見かけると言われています。

## ◎、秩父山の札所

村落から多幸湾に行くカヌーの多い都道の途中、赤羽根の峠の右手に、「秩父山札所登山口」と書かれた木柱が建てられているのが見えます。

そこから細い道筋が秩父山（標高二八二米）への参道で、昔から自然木の根や自然石の階段を尾根伝いに取り付けています。

参道に入って樺の林の中に、（南無阿弥陀仏・阿南）と刻まれた石碑が建てられています。それが頂上までの間に、木の根株の間や土手の石室に収められた、地蔵の石仏が数か所に祀られ、「七観音」と呼ぶ所には観音の石仏七体と、地蔵の石仏が、昔と変わらぬ表情で祀られています。

この七観音から先の道は石段続きの、勾配の強いだらだら坂になり、手すり代わりに張られたロープにすがり、呼吸を整えながら登り続けると、やがて展望台のある尾根の台地に辿りつきます。

ここには「廿三夜得大勢至菩薩」と（青面金剛）と刻まれた二基の石碑が並び、また数十体の地蔵の石仏が二群に分けられて祀られています。

この地蔵の石仏は海難事故で亡くなった人の供養のものと云われ、昭和三十二

年の一月に恩馳島で遭難した、神奈川県三崎港の犠牲者を悼む、地蔵の石仏は救助に携わった島の船の乗り組みの人の名が刻まれています。

丸太組の展望台に昇ると、右下には赤や白青の村の家並みが広がり、正面の沖合には、今日はゆつたりとした恩馳島が、その手前には神津島空港の滑走路と白い建物が見え、眼の下のパイプ・ハウスでは忙しく働く人が点になって見えます。

その台地からさらに大凡一〇〇メートル程尾根を昇りつめると、観音堂と札所のある頂上に着きます。

観音堂は四方を石積で囲み、山の強風を防いでいます。観音堂は間口が二間半位で奥行は三間程で、左手は土間で煮炊きが出来るようになっていて、座敷の奥の方に観音や地蔵の石仏が所狭しと並んだ祭壇が見えます。

この石仏の内一番古いと思われる、如意輪観世音の台座には、明和元年（西暦一七六四年）の八月と刻まれています。これは観音堂の開基と思われるかもしれませんが然しこの夥しい石仏はどうしたものでしょうか。

如意輪観音や十一面観音などの像は、同じ時代の物と思われませんが、同じ祭壇に並ぶ地蔵の石仏はかなり新しいようで、おそらく海で犠牲になられた方の供



養の為のものと思われず。

明和元年は今から二百五十年も前になりますが、この山道を重い石仏を背負い、此処に祀らなければならぬ理由や出来事は、一切伝わっておりませんが、暗い光の中で石仏は黙したままです。

お堂の外へ出ると一段高くして土手を缺んだ札所があります、札所の入り口は仕切りの石で区分し、この中を島の人たちは「ヤシロ様」と呼び、特別な聖域としています。

このヤシロ様の中でコの字形に並ぶ石塔は、中央に地藏と思われる石仏二体を置きそれから右側へ秩父一番から十八番が並び、それから左側に飛び、十九番から中央に戻り三十三番になり無番の千手大悲観世音になりますが、秩父札所の三十四番の結願寺、秩父市皆野町の水潜寺の御本尊佛は、千手観音であるので、三十四番を表していると思います。

これらの石塔は高さがまちまちですが、台座を別にして大凡六〇センチほどの文字碑で、秩父何番正観世音とか秩父何番十一面観世音と刻まれている、文字別にみると次のようになります。

聖観世音が一基

正観世音が一基

聖観世音菩薩が 十一基

正観世音菩薩が 八基

十一面観世音が 二基

十一面観世音菩薩が三基

千手大悲観世音が 一基

千手観世音菩薩が 三基

如意輪観世音が 一基

如意輪観世音菩薩が一基

準胝観世音菩薩が 一基

馬頭観世音菩薩が 一基で、合計三十四基になります。

ここ観音名を記した石碑の文字を、秩父札所の寺の本尊佛と比較して見ますと、秩父十七番の実正山定林寺の本尊佛は十一面観世音ですが、何故かここは千手観世音になっている外、正と聖の違いはありませんが概ね合致します。

この秩父札所の開基の言い伝えも残されていませんが、第二十番の石碑の横に「弘化三年午歳正月吉日」（西暦一八四六年）と刻まれているのを見ますと、この

年が札所の開基とも考えられます、なお堂内の石仏の台座に刻まれた年より、八十年後ですが、秩父山は古くは横山と言ひ、観音堂は、横山観音堂と呼ばれたと伝えて秩夫山と名前が変わつたのは札所が出来たからとされています。

この秩父札所は、村内に不幸があり、葬礼が終わると七七忌までの間に、親戚知己はこの札所に詣で、その証に堂内に木の葉を残して来ます。

その木の葉三十三枚で一札とし、五札または七札になるまで札所に昇り、死者を悼む信仰が生きた形で残されています。

この頃は葬礼が終わるとそのまま秩父山の札所に昇る人が多くなつたと聞いています。今の人たちは昔の人より忙しくなつたものでしょう。

## 庵屋の札所

神津沢沿いの都道沿いに立つつばきや釣具店の、脇の細道を登つて行くとやがて家並みが途切れて、小高い丘の麓に突き当たりますが、道路はそのまま都道に繋がります、この突き当りから段々畑への上り道があります。

このだらだら坂の道は庵屋の札所に通じる山道で、椿の葉の繁る峠道を超える、今度は上り下りの道になり、そのまま辿ると沢伝いに流れる小川に架かる丸木橋があり、やがて道は深い木立の中を椎の木やたみの木の、大木がびっしり葉をつけて枝を伸ばし、日の光も遮られていて土手の土も湿っているのが判ります。

深い沢の下からは沢水の流れる音が、意外なほど高く聞こえてくるので、水嵩でも増えたのかと思ひ、一瞬、深山幽谷に彷徨うような心地にさせられます。

島の人たちが庵屋と呼ぶ建物が建っている所は、意外なほど明るい台地でこの頃庵屋の建て替えの折、山側の土手を切り崩して台地を広げて、また土留めの石積がされています。

台地の北側に寄せて建てられている庵屋は、今風の平屋建てで明るいガラス・サッシュの引き戸が、南向きの部屋の中へ太陽の日差しを温かく届けています。建物の右に入口が設けられ、土間に続いて畳み敷きの部屋で、その正面に祭壇が作られていて、そこには御本尊の観世音菩薩を中心に三体の仏像を納めた黒塗りの厨子が置かれ、その下の段には数体の石仏が左右に祀られています。また黒塗りの厨子の扉の裏側には、この庵の建て替えや厨子の修理の年月日が墨書されています。

改めて庵の中を見回しますと、土間近くに囲炉裏が切っており、その後ろの戸棚には湯呑や茶碗などの食器類が仕舞われています。

東側の張り出しには、昔スタイルの釜戸が据えられて綺麗に整理されています。

建物の前の敷地は以前から較べると、三倍以上に広げられていて、切り崩した土手からは絶えず湧水が流れていて、敷地の中ほどに浅い溝を掘り、石積から下へ落としています。それでも敷地の半分は濡れています。前はここに溜樹を作りその水を使用していたのですが、今は水道のカランが見えるので、この山中に水道が引かれています。

改築されない昔の庵はトタン葺きのこじんまりしたもので、痛みも酷く柱も傾

いていて、後ろの椿の幹に寄りかかるような状態でした。

それで島の人たちが浄財を募り、それで改築されたと聞きますが、村落に近いとは言え山坂を超える山道なので、資材運搬に大変な苦労があったと言います。庵を取り巻く土手に舟形の光背の石仏が、数体据えられています。また庵の西側に「坂東三十三所巡礼場」と刻んだ石柱が一段高く据えられているその下に、坂東三十三ヶ寺の御本尊佛の観世音菩薩の名を刻した文字碑が、コの字の形に並んでいます。

ここを島の人たちは「庵屋の札所」と言い、昔から信仰を集めている所です。島に不幸があると家族や親戚や友人・知己はここへ札納めをしていたと言われていますが、今は忌服明け(ブツクアケ)の時、参詣するだけと聞きました。

今から二百年ほど前、嘉右衛門と言う島の人は、嫁いで間もない新妻や家族を残して遠く東北の方へ出稼ぎに行きました。

何年か島を離れて働いていましたが、ようやく島に帰ることを決めました。離れて暮らした妻に会える喜びに、心躍る思いで島に帰った嘉右衛門を待っていたのは、なかなか帰らない夫を待ちわびた妻が、死んだという悲しい知らせで

した、嫁に迎えて数ヶ月心を残して遠い北の国で、身を粉にして働いたのは懸命に島の暮らしを支えてくれた、愛しい妻の苦勞を思えばこそであったと、日々悲嘆に暮れていました。

思い余った嘉右衛門はある日濤響寺の第一八世国誉上人の許を訪ねました。日々の辛い思いを話し、是非仏弟子として入信帰依したいと願いますが、上人は佛道の厳しさを話されますが、嘉右衛門の決意の固さとうら若くして世を去った嫁を思う心に打たれ、入信を許されました。

嘉右衛門は佛弟子としての厳しい日々も、妻の冥福を祈る日々を送りましたが、それでも心の癒えることが在りませんでした。

やがて嘉右衛門は笈(オイ)を背に、坂東八ヶ国三十三寺の巡礼の旅に、国誉上人や家族知人の見送りを受けながら旅立ってゆきました。

坂東とは、相模の国(神奈川県)武蔵の国(東京都)、埼玉の国(安房の国)、上総の国、下総の国(千葉県)常陸の国(茨城県)下野の国(栃木県)上野の国(群馬県)の八ヶ国の総称で、現在の関東地方を坂東と呼びました。

この国々の札所を巡るのは、現在も大変なことですが、およそ二百年も前のことで総べて徒歩での旅ですから、その巡礼の旅は想像も付かない不自由なものであったと思われれます。

こうして嘉右衛門は亡き妻の冥福を祈りの、辛い巡礼の旅から帰りましたが、そのまま自家の舎人(とねり)の山へ小さな庵を建て、一人念佛三昧の生活を送ったと言います。

それからこの庵は「どのりの庵屋」と呼ばれるようになりましたが、これがこの庵屋の創設の由来と言います。

この庵の御本尊として祀られている観世音菩薩の像は、かつて嘉右衛門が巡礼の折笈で背負っていた、仏像と言われています。

安政五年(西暦一八五八年)濤響寺第一九世西誉上人の時、島の石田五郎左衛門外大勢の人達が、嘉右衛門の坂東札所巡礼の故事に因みここに坂東三十三ヶ所の札所を開創したい申し出で、許しを得たので、それから「庵屋の札所」と呼ばれるようになりました。

嘉右衛門家では代々この庵を大切に守って来ましたが、何せ遠くもあり山畑の忙しい時漁の上がるときは、ついつい手の届かないことがあるので、やむなく七軒町の出先の「せんき」の地にこの札所を移しました。

その時、札所の「坂東三十三ヶ所順礼場」と刻んだ石碑を、嘉右衛門家の婆さ

んが頭に載せて、この山道を「せんき」まで運んだと言います。

その後瀧響寺の住職が「夢の中に嘉右衛門が現れて元の場所へ帰りたと言っていた、元の（とのり）へ移してはどうか」と家族の者に話されたので、再び（とのり）へ札所が移し替えられました。

その時この「坂東三十三ヶ所順札場」の石碑は、何としても重くて運べないので、そのまま「せんき」に残されてしまいました。

昭和六十年頃、「せんき」の札所の跡地に住宅を建てるため、この石碑を「とのり」まで運ぶことになりましたが、血気の若者八人でやっとなり終えたと言いますが、その昔、一人でこの石碑を運んだと伝える、お年寄りのことを考えると、昔の人たちの他人に頼らない、昔の暮らしぶりだったのでしょうか。

安政五年は島はかつを漁の余韻がまだ少し

あり、経済的には恵まれていた時代であり、この坂東札所は札所巡礼記念のものではなく、島に居ながらここに贅詣することで札所巡りが出来る場所と考えたものと思われまます。

なを、観音浦の西国札所や、秩父山の秩父札所は巡礼を行った記念にと言う色彩を感じますが、この庵屋の札所には嘉右衛門の坂東札所巡礼の故事が開創の元のように思えます。

また、庵屋の札所まで辿る道筋に地藏などの石仏が、祀られていなことも違っています。

これはかつお漁の終焉が、其の頃ちらついていたように私には見えます。

この庵屋の札所の開創については、かなり詳しく伝承が残されていますが、なぜ秩父山の札所やお観音浦には残されておりません。これは当時の瀧響寺の住職の力強い説教と信頼関係で、誰がではなく村中一致の事業であったので特別な人は無かった、また住職は自分のその名を出すことを控えたものとおもわれます。